

223 甲冑が伝える日仏交流の夜明け（2023 年 12 月 26 日）

フランス各地の美術館で、日本の甲冑を見ることに驚きます。甲冑を展示しているのは、アジア美術を専門とする美術館に限りません。今回は、日本の甲冑をご紹介します。

甲冑の基本的な構造は、小札（こざね）と言われる5～7センチの大きさで、革や鉄で作られた小さな板を、組紐や革で繋ぎ合わせて作られています。数十枚、中には数百枚の小札が連なる手が込んだ甲冑もあります。小札の表面には、補強や



防錆のために黒色や赤色の漆が塗られ、金箔や銀箔を張った小札も作られました。江戸時代は、徳川幕府による大平の世で、大きな戦いはありませんでした。甲冑は、武士の権力を示す意味合いが強くなり、より装飾性の高いものが作られるようになりました。ヨーロッパの甲冑は基本的には鉄で作られています。一方、日本の甲冑は、ヨーロッパのものとは使われている素材も技術も全く異なります。この違いが、フランス人コレクターが日本の甲冑に惹きつけられる理由ではないかと思われます。

パリの軍事博物館が所蔵する日本の甲冑の中には、17 世紀初めに作られた二領の甲冑があります。これらのうちの一つは、[ベルサイユ宮殿の「鏡の間」の天井画に描かれた甲冑](#)（写真下）のモデルになったと言われているものです（写真右）。以前にこの天井画は、將軍徳川家から贈呈品としてヨーロッパへ送られたものと推測



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

されているとご紹介しました。その後、この甲冑は、江戸幕府を開いた徳川家康からオランダを経由してルイ 14 世の手に渡ったものであることが判明していることを知りました。

1600 年に、オランダ人航海士のヤン・ヨーステン（1556?-1623）が、イギリス人航海士のウィリアム・アダムス（1564-1620）とともに、商船リーフデ号で、日本に漂着しました。最初は海賊ではないかと疑われましたが、アダムスとヤン・ヨーステンは徳川家康の信頼を得て、外交面で家康に助言を与えるまでになりました。この甲冑は、岩井与左衛門という家康と秀忠に仕えた具足師（甲冑の制作や修理をする職人）が作ったと伝えられるものです。甲冑は、家康からヤン・ヨーステンを通じて、オランダに渡ったと考えられています。

17 世紀後半、ルイ 14 世は、領土拡大のために隣国のスペイン領ネーデルランド（現在のベルギー、オランダ、リュクサンプルクと北部フランスの一部）と戦争を繰り返していました。鏡の間の天井画は、戦いに勝利したルイ 14 世の権力と偉大さを知らしめる場面が描かれています。この甲冑は、「ゲントの占領によって絶たれたスペイン人による支配」というタイトルが書かれた絵の端に描かれています。ルイ 14 世が、スペイン領ネーデルランドを支配下に収めたことで、ヤン・ヨーステンによってオランダに伝えられた日本の甲冑が、フランスに渡ったと推測されます。天井画を描いたシャルル・ル・ブラン（1619-1690）は、見たことがない遠いアジアにある日本の甲冑を描くことで、世界を征服するルイ 14 世の権威を示したかったのかもしれません。

400 年以上前に作られたこの甲冑は、まだフランスと日本が直接的に交流をしていなかった時代にフランスへ渡り、ベルサイユ宮殿の天井画に描かれ、日本とフランスを結びつけました。日本人が初めてフランスの地を踏んだのは、甲冑と同じ時代の 1615 年に南仏のサン・トロペに数日間寄港した[支倉常長](#)だと考えられています。現在では、幅広い分野で関係が深まっている日本とフランスの交流の歴史は、このような出来事から始まりました。